

私の終戦の想い出

埼玉県 下田 登

一、部隊長の決断

八月十五日は、よく晴れ上がって暑い日であった。重大放送があるので、服装を整えて本部に集合せよとの伝達があり、急ぎ会議室に集った。

本国から送られて来た終戦の詔勅は、雑音で、ところどころかすれて聞き難い点が多かったが、日本が敗けて戦争は終わったことはわかった。足がガクガクして、思わず腰が下りてしまい虚脱感に全身の力が次第に抜けて行ったのが今でも、はっきりと思い出される。誰もが茫然自失。どうすればいいんだ。なんともいえぬわびしさが胸をしめつけた。そんな時だった。部隊長の決断は早かった。放送を聞いてから一時間ぐらい過ぎたと思う時、部隊長室に呼ばれたのは、私のほかに二人だった。部隊長の言葉は美に静かに、ゆっく

りとした落ち着いたものだった。

一、軍属は、本日限り軍との関係を断つ。直ちに全員民間人となり、退去するよう。

二、あわてることはない。一年もすれば本国に帰れると思う。今からただちに籠城の準備をするよう、三人が責任者となり、力を合わせて団結し、全員がぶじ本国へ帰れるよう頼む。軍人の家族も頼む。それにはまず食糧だが、これは軍の食糧倉庫に使いの将校を出しておくから、車は部隊のものを使ってよろしい。計画は三人で立ててくれ。金は今ないが、あるだけ渡す。

(約二万五千円ぐらいだったと思う)

人員は約三百人ぐらいであった。私たちは、十六日早朝からトラック六台に約百人ぐらいだったと思う。まず米、味噌、醤油等の主要食品を、十七日には油、ローソク、缶詰等を運んだ。午後になると満人が騒ぎ始め、危険になってきたが、最後今一回と、多少の危険は覚悟の上で、軍手、靴下、マッチ等を運んだ。これは初めから考えて計画の中に入れてあった。自分等で使うものではなく、困った最後の時に、中国人と物

又は金に交換する用意の品々であった。これは後になつて、米以上に役に立ち、みんなから喜ばれた。

(一戸当り軍手、靴下とともに十五ダースぐらいだったと思う。当時軍手二足とマッチ二個で一日の生活費が足りた)

あの時、部隊長の決断が半日遅れていたら、私たちの生活に相当の困難があつたと思う。お蔭で私たち三百人近い人達の生活は、食糧については、あまり困らなかつた。今でも感服している。

二、帰国日を待ちこがれた一年

軍がなくなり、警察が姿を消して、すべての日本の組織は、またたく間に消滅していき、もう日本人の安全を守ってくれるものは何もなくなくなってしまった。

日暮れ時、日が落ちるのを合図か、たくさんの満人が走り廻る足音がして騒がしくなり、その内、間断なく銃声がしだした。街のあちこちで、不気味な喊声があがり、それにつれて、ますます銃声の声が増していった。それが近づいたり、遠のいたり、流れ弾が屋根に鋭い音で当り、ピューンと飛弾の音。その度に生き

た心地がしなかつた。ただくじっと夜の明けるのを待つばかりだった。夜が明けると、急に静かになり、ほっと一息ついた。

さいわいに私たちの所は襲われなかつたが。どの街では何人殺されたとか、不吉な話が飛び交い、私達の所も、いつこの暴動の波に襲われるかと、その時とは、一人覚悟したことが何度あつたが、そのような状況下が続いていた中で、私共は襲撃されることなく、九月の月を過ごすことが出来たのであつた。

私共の部隊は、ジャムス駐屯の航空隊であり、敗戦の半年前に、部隊の半数近くを南満の都市防衛のために奉天の北飛行場に移動した関係で、敗戦後となつても部隊の形体は保たれていた、従つて暴民の襲撃を受けなかつたのではないかと思われ、不幸中の幸い、とはこのことであつた。

天地の大逆転をもたらした八月十五日の衝撃も、少しづつ鎮まって、暴動もおさまり、不安定な生活にも慣れて、満人の所に働きに出る者、商売をする人、それぞれに生活の道を開いて行き始めた。そして内地に

帰り着ける日を、じっと待って、生き抜く覚悟を続けた。

回顧の記

埼玉県 手島 信

昭和十五年二月十一日の良き日、主人と結婚をしました。東京駅の夜行にて万歳の声に送られましたが、渡満を奨めた父は一人ただ無言。腕を組み目をつむっていました。父は文部省より教育視察に派遣され様子を知っているのです。

大連の都ホテルに一休み、目的の承德に着きました。「白蘭の歌」のロケで来られた長谷川一夫さんと野球をした時のことを主人は話してくれました。見る物、聞く物皆はじめて、日暮れになると山の彼方を見ては涙を流しました。

十六年四月三十日長男誕生、興進公司の一字を取り進一と名付けました。十七年の六月、青龍県に綿花会

社建設のため万里の長城の見える険しい山谷を越え、八時間もトラックに乗り青龍入りをしました。今の金額で数十億円もの工事でした。

主人の仕事は忙しく、省公署、県公署、国際運輸と飛行機で飛び廻りました。

二十年のある昼時、満人には内証に出征するように言われ、一人ひっそり錦州へ入営しました。八月十日長女のお誕生日の真夜中、外はいっぱいの日本の兵隊です。隊長は「お前はここに泊つてよい」と主人に言う。早朝、軍靴の紐を結んでいる主人は、「ソ連と開戦だ、今度会うとき、白木の箱かも知れない覚悟していってくれ」。私は、「死なないで、死なないで下さいね」と、つぶやきました。

八月十日に軍の家族が一番先に疎開をはじめ、私達親子も、目的地もなく少しの荷物を持ち、また帰って来るからと八月十五日に出発しました。ローソクを持った男性が「日本は全面降伏をしました」と。錦州駅に下車してたら、日本軍馬がバックパッカと所狭しと駆け廻って恐ろしいさまに言葉もないほどでした。錦